

令和 4 年 5 月 25 日現在

機関番号：14401

研究種目：基盤研究(C)（一般）

研究期間：2017～2021

課題番号：17K02450

研究課題名（和文）1940年代の新聞における文芸欄の基礎的研究

研究課題名（英文）A Basic Study of Literary Columns in Newspapers in the 1940s

研究代表者

斎藤 理生（SAITO, Masao）

大阪大学・文学研究科・教授

研究者番号：40431720

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 3,400,000円

研究成果の概要（和文）：1940年代の日本は、戦時下から被占領期にあたる未曾有の混乱期に当たる。当時、新聞は人々にとって極めて重要なメディアであった。しかし物資不足で紙面はわずかしかなかった。報道されるべき事件や出来事は数多く、スペースはごく限られた新聞に、それでも掲載されていた文芸に関わる記事とは、どのようなものであったのだろうか。特に、これまで注目されてこなかった地方新聞や、全国紙の地方版を中心に調査し、考察した。

研究成果の学術的意義や社会的意義

戦時下から被占領期にあたる、1940年代の日本で発行された新聞の文芸記事を調査した。特に、全国紙の地方版や、地方新聞、新興紙、専門紙、学生新聞など十分に検討されてこなかった新聞を調査した点が特徴である。その結果、戦後の「朝日新聞」西部版や戦中の「芸術新聞」の文芸記事目録を作成し、戦中戦後の文芸文化を研究する基礎資料を提供すると共に、三島由紀夫、坂口安吾、横光利一、織田作之助といった、現在も高く評価されている作家の全集未収録資料を発見することができた。

研究成果の概要（英文）：In the 1940s, Japan was in a period of unprecedented turmoil, from the wartime to the occupied period. At the time, newspapers were an extremely important medium for the people. However, due to lack of supplies, there were only a few pages available. What kind of articles related to literature and art were published in newspapers that had only a limited amount of space to report the many incidents and events that needed to be reported? This report examines this question by focusing on the local editions of national newspapers and regional newspapers that had not received much attention in the past.

研究分野：日本文学

キーワード：新聞 被占領期 戦時下 地方版 文芸記事 地方新聞 目録 全集未収録

1. 研究開始当初の背景

新聞の文芸欄の研究は、新聞小説に関する高木健夫『新聞小説史』(国書刊行会、1974-1981)の先駆的な業績以来、一定の蓄積がある。近年にも関肇『新聞小説の時代 メディア・読者・メロドラマ』(新曜社、2007)等が、新聞メディアとその掲載小説が近代文学の生産と享受に与えた影響に新しい光を投げかけている。ただ、新聞小説が成立・普及していった明治大正期の研究の進展に比べて、昭和以降の新聞の文芸欄の実態や社会との関わりは、個別の優れた成果はあるものの、十分には考察されていない。だが昭和期は、読者数が飛躍的に増加し、新聞が最も身近な情報媒体となった時期である。本研究は1940年代の文芸欄を調査・分析することで、この空白を埋めようとするものであった。

報告者はそれまでも敗戦直後の新聞小説を研究していた。特に1945年9月から1946年12月までに4つの新聞連載小説を書いた織田作之助を中心に考察していた。織田は同じ紙面の記事や広告欄を積極的に利用した小説を書いた。連載中の新聞の記事や広告の側にも、織田の小説の題名や内容を利用したものがあつた。つまり織田の連載小説は、初出紙面の他の欄と連動して読者を惹きつけていたのである(斎藤理生「織田作之助『それでも私は行く』論 「京都日日新聞」を手がかりに」(「國語と國文学」89(10)、2012年10月)、「織田作之助『夜光虫』論 「大阪日日新聞」を手がかりに」(「國語國文」84(12)、2015年12月)などを参照されたい)。そして織田の作品ほど徹底していなくても、当時の、特に地方紙の新聞小説には、紙面の他の欄と関係づけて読まれたであろう要素が多くある。戦中戦後、物資や輸送力の不足によって紙面が縮小し、人々の生命が脅かされる時期になっても、紙面から文芸に関わる言説が完全になくなることはなかった。そうした極限状況における社会の文学への期待や関心の実態を知るためにも、連載小説を初出紙面で読み直す考察は今後も追究されるべきである。

ただし研究を進めてゆく過程で、3つの必要が浮上してきた。

(1)戦中戦後を横断的に検討する必要。確かに戦後GHQによって進められた新たな検閲制度や新興紙への優遇といった政策は、新聞界を大きく改革した。だが新聞をめぐる環境は、すでに戦中から激変していた。特に1938年に始まり1942年に完成した新聞資本の統合は、1945年以降も継続し、戦後の新聞メディアの基盤となった。一つの県に一つの県紙が置かれる制度は、現在もほぼ引き継がれている。作家の活動も、そのような新聞の変化に影響を受けている。

(2)より多様な新聞を研究対象とする必要。中央の三大紙に加え、地方紙も積極的に調査する必要がある。1940年代には多くの作家や編集者が疎開した。そのため従来の調査から洩れてきた地方新聞に、まだ陽の目を見ていない文学史的に貴重な資料が残っている。くわえて、当時「新聞」と呼ばれていた媒体の多様性も軽視するべきではない。当時は「芸術新聞」のような文化・芸術領域に特化した専門紙や、「帝国大学新聞」のような特定の場で集中的に読まれた機関紙があつた。1940年代の文学者たちは、これらの新聞にも多くの作品を寄稿している。そこでの文芸欄の実態も解明しなければならない。

(3)創作欄以外にも調査を広げる必要。敗戦直後の新聞小説に関する調査の過程では、小説以外の貴重な資料も見つかった。断簡零墨まで調べ尽くされたはずの高名な文学者の随想が、複数発見されたのである。中でも小林秀雄の随想の発見(「小林秀雄「政治家」解説」、「新潮」112(9)、2015年9月)は、「朝日新聞」で報道された後「天声人語」や「産経新聞」の社説において現代にも批評性を失わない意見として言及されるなど、社会にインパクトを与えた。小説だけでなく、随想・評論にも目を配る必要がある。

以上3つの課題を乗り越えるためには、研究対象とする時代を1940年代とし、扱う対象に専門紙や機関紙を加え、扱うジャンルを連載小説を含む文芸欄に拡張することが有効だと考えた。

2. 研究の目的

本研究では、1940年代の新聞における文芸欄の実態を調査・分析した。研究の主な目的は、戦中戦後の新聞における文学者の創作・随想・論説などが、混乱期の日本の何をどのように表現していたのかを浮き彫りにし、それらの特徴と社会的役割を明らかにすることである。もともと新聞は、雑誌や単行本と比較して、後世に受け継がれにくい媒体である。新聞紙そのものにも様々な用途があるため、社会の混乱期においては特に残存しにくい。そのため調査も進みづらく、当時の新聞における文芸欄の実態にはわかっていないことが多い。

研究を進めるにあたっては、中央の大手新聞社が東京で発行したものだけでなく、その地方版や地方紙、夕刊紙、専門紙、機関紙など、多様な種類の新聞を取り扱い、多角的にアプローチする。このような研究は、個別の新聞・作家・作品の理解を深め、埋もれていた資料を発掘することはもちろん、近代の文芸・文化とメディアと読者との関係を再検討する歴史的な視座を得ることにもなるはずである。

3. 研究の方法

本研究では1940年代の新聞における文芸欄の実態を考察する。考察の核となるのは新聞小説の表現構造の分析と、地方紙・新興紙・専門紙・機関紙等の文芸に関わる記事の細目の作成、そ

れに伴う新資料の発掘である。

具体的には、織田作之助、高見順、大佛次郎といった作家たちが、戦時下から戦後にかけて、「大阪新聞」「東京新聞」「毎日新聞」といった、地方紙や全国紙に発表した新聞連載小説を分析した。

また、文学・美術・音楽・演劇・映画などに関わる情報を網羅した専門紙である「藝術新聞」の、これまでに発掘されていなかった号を調査し、文芸記事目録を作成した。

さらに、全国紙の地方版特有の記事を明らかにするために、「朝日新聞」の、東京版とは異なる記事が載せることがある西部版の文芸記事目録を作成した。

このほかに、学生新聞や戦後の新興紙についても折に触れて調査を行った。その過程で、複数の新資料を得ることができた。

4. 研究成果

研究成果は、(A)新聞小説の研究、(B)細目の作成、(C)全集未収録資料の発掘という三つの種類に分けられる。以下、順に説明する。

(A) 新聞小説の研究

「織田作之助『清楚』論 「大阪新聞」を手がかりに」(「日本研究論集」16、24-39、2017年10月)では、織田作之助が戦時下に「大阪新聞」に連載した小説の構造を、当時の紙面の他の記事や挿絵に注目しつつ分析した。

「大佛次郎『帰郷』の成立」(「國語國文」88(6)、1-16、2019年6月)では、敗戦直後の全国紙に連載され、高い評価を受け、作家の代表作ともなった大佛次郎の『帰郷』を、創作ノートや大佛が直前に地方紙「京都日日新聞」に連載していた作品と比較しつつ分析した。

また、「『毎日新聞』のなかの『帰郷』」(「おさらぎ選書」27、27-48、2019年11月)では、『帰郷』という連載小説の内容が、当時の「毎日新聞」紙面とどのように関係していたのかを明らかにした。

「織田作之助『人情噺』論」(「待兼山論叢」53、1-17、2019年12月)では、織田作之助が「夕刊大阪」(未見)に発表した作品を、大阪府立中之島図書館に所蔵されている草稿や、戦後にタイトルを変えて短篇集に収録されたことに着目して分析した。

「高見順『東橋新誌』論 「東京新聞」を手がかりに」(斎藤理生・杲由美編『新聞小説を考える 昭和戦前・戦中期を中心に』パブリック・ブレイン、2020)では、「東京新聞」に連載された高見順の小説を、同時期の紙面との関わりや、当時の東京を見つめ直させようとする手法に着目して分析した。

(B) 目録/細目の作成

「『藝術新聞』目録 自第五九九号至第六三二号(不揃)」(「阪大近代文学研究」19、68-86、2021年3月)および「『藝術新聞』目録 自第六三三号至第六七四号(不揃)」(「阪大近代文学研究」20、34-47、2022年3月)では、「藝術新聞」の、これまで調査が及んでいなかった号の目録を作成した。この新聞は、文学・美術・音楽・演劇・映画などに関わる情報を網羅した専門紙である。当時の各界の最新のトピックに加え、情報局や文学報国会の動向など、今では得がたい情報が掲載されており、戦時下における藝術の動向を知るための基礎資料として活用されることが期待できる。

「『朝日新聞』西部版学芸記事細目(一九四六年三月～一九四九年一月)」(「大阪大学大学院文学研究科紀要」62、67-92、2022年3月)では、九州で発行されていた「朝日新聞」の地方版に掲載されていた文芸文化に関わる記事のデータを記録した。「朝日新聞」のデータベースでは記事検索ができるが、すべての時期が均等に検索対象になっているわけではないようで、1940年代にはヒットしない記事も多い。特に、地方版はまず検索では見つからない。しかし三島由紀夫や梅崎春生、林芙美子の掌篇や、坂口安吾の随筆など、これまで知られていなかった有名作家の作品をはじめ、当時の東京版には含まれていない記事が数多く見つかることがわかったために、ここにデータを公開した。

この他に、敗戦直後の京都で発行されていた「都新聞」という新興紙の1946年6月1日から1947年5月31日までの1年間の文芸記事目録を、リサーチマップの「資料公開」に掲載している。

(C) 全集未収録資料の発掘

「『資料紹介』織田作之助全集未収録作品紹介(二)「一流の鑑賞」」(「阪大近代文学研究」16、53-58、2018年3月)、「『資料紹介』織田作之助全集未収録資料紹介(三)「関西の文学運動」」(「阪大近代文学研究」17、150-157、2019年3月)、「『資料紹介』織田作之助全集未収録作品紹介(四)随筆「女と婦人」と談話」(「阪大近代文学研究」18、54-58、2020年3月)においては、それぞれ戦時下の地方紙「大阪新聞」、学生新聞である「関西大学新聞」、敗戦直後の新興紙「東京タイムズ」に掲載された織田作之助の全集未収録資料を発掘し、公開した。

「『研究ノート』「けし粒小説」とその時代 敗戦直後の「朝日新聞」大阪版および名古屋版の創作欄」(「阪大近代文学研究」16、59-63、2018年3月)では、1946年から47年にかけて「朝日新聞」の地方版のみに連載されていた掌篇小説シリーズを発掘し、公開した。なお、その中の一つは「新発掘・坂口安吾「復員」とその背景」(「新潮」115(4)、2018年4月)という文章で紹介したことで、新聞・テレビ・インターネットなどで話題を呼んだ。

「『定本横光利一全集』未収録資料紹介 座談会「横光利一氏をかこんで」、談話「永久の勝利

へ 征戦第二年の想念」(「横光利一研究」18、149-163、2020年3月)では、戦時下の「大阪時事新報」に掲載された横光利一の談話を発掘し、報告した。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計12件（うち査読付論文 4件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 6件）

1. 著者名 齋藤理生	4. 巻 20
2. 論文標題 < 資料紹介 > 「藝術新聞」 目録 : 自第六三三号至第六七四号 (不揃)	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 阪大近代文学研究	6. 最初と最後の頁 34-47
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.18910/87531	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -
1. 著者名 齋藤理生	4. 巻 62
2. 論文標題 「朝日新聞」 西部版学芸記事細目 (一九四六年三月 ~ 一九四九年一月)	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 大阪大学大学院文学研究科紀要	6. 最初と最後の頁 67-92
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.18910/87427	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -
1. 著者名 齋藤理生	4. 巻 19
2. 論文標題 「藝術新聞」 目録 自第五九九号至第六三二号 (不揃)	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 阪大近代文学研究	6. 最初と最後の頁 59-77
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.18910/81792	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -
1. 著者名 齋藤理生	4. 巻 88-6
2. 論文標題 大佛次郎『帰郷』の成立	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 国語国文	6. 最初と最後の頁 1-16
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 斎藤理生	4. 巻 27
2. 論文標題 「毎日新聞」のなかの『帰郷』	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 おさらぎ選書	6. 最初と最後の頁 27-48
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 斎藤理生	4. 巻 18
2. 論文標題 《資料紹介》織田作之助全集未収録作品紹介(四)随筆「女と婦人」と談話	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 阪大近代文学研究	6. 最初と最後の頁 54-58
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.18910/75549	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 斎藤理生	4. 巻 18
2. 論文標題 『定本横光利一全集』未収録資料紹介 座談会「横光利一氏をかこんで」、談話「永久の勝利へ 征戦第二年の想念」	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 横光利一研究	6. 最初と最後の頁 149-163
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 斎藤理生	4. 巻 95-4
2. 論文標題 一九四七年前後の 小説の面白さ 織田作之助と「虚構派」あるいは「新戯作派」	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 国語と国文学	6. 最初と最後の頁 34-49
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 齋藤理生	4. 巻 17
2. 論文標題 《資料紹介》織田作之助全集未収録作品紹介(三)「関西の文学運動」	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 阪大近代文学研究	6. 最初と最後の頁 151-157
掲載論文のDOI(デジタルオブジェクト識別子) 10.18910/71761	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 齋藤理生	4. 巻 16
2. 論文標題 織田作之助『清楚』論 「大阪新聞」を手がかりに	5. 発行年 2017年
3. 雑誌名 日本研究論集	6. 最初と最後の頁 24-39
掲載論文のDOI(デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 齋藤理生	4. 巻 16
2. 論文標題 《資料紹介》織田作之助全集未収録作品紹介(二)「一流の鑑賞」	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 阪大近代文学研究	6. 最初と最後の頁 53-58
掲載論文のDOI(デジタルオブジェクト識別子) 10.18910/68149	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 齋藤理生	4. 巻 16
2. 論文標題 《研究ノート》「けし粒小説」とその時代 敗戦直後の「朝日新聞」大阪版および名古屋版の創作欄	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 阪大近代文学研究	6. 最初と最後の頁 59-63
掲載論文のDOI(デジタルオブジェクト識別子) 10.18910/68150	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著 -

〔学会発表〕 計3件（うち招待講演 0件 / うち国際学会 0件）

1. 発表者名 斎藤理生
2. 発表標題 藤澤桓夫『翼』論 「朝日新聞」を手がかりに
3. 学会等名 新聞小説を考える会 新聞小説の戦前 / 戦中
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 斎藤理生
2. 発表標題 「朝日新聞」地方版の文藝欄の問題 一九四〇年代を中心に
3. 学会等名 新聞小説を考える会 1930年・1940年前後の新聞小説
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 斎藤理生
2. 発表標題 戦時下大阪の新聞小説 織田作之助『清楚』の方法
3. 学会等名 第8回大阪大学・チュラロンコン大学日本文学国際研究交流集会
4. 発表年 2017年

〔図書〕 計1件

1. 著者名 斎藤理生	4. 発行年 2020年
2. 出版社 パブリック・ブレイン	5. 総ページ数 118 (3-7, 92-114)
3. 書名 新聞小説を考える 昭和戦前・戦中期を中心に	

〔産業財産権〕

〔その他〕

「都新聞」文藝記事目録 1946.6.1～1947.5.31
https://researchmap.jp/multidatabases/multidatabase_contents/detail/228944/5f25ddacf3b28a3986cc594e69933591?frame_id=829181

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
--	---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------